

えっ？
平凡ですよ??



◀ ジル

リリアナが隊商の市を訪れたときに出会った老人。なぜかリリアナを気に入っているが……？

レオーネ ▲

治療師。厳しくて頑固だが、優しい一面も持つ。

▲ オリヴィリア ▲
伯爵夫妻


リリアナの両親。大変お人好し。娘を溺愛している。

ミスティア ▲

強大な力を持つ水の精霊。いつもシリウスのそばにいる。

シリウス ▲

リリアナの家庭教師。美形だが、いつも無表情。



ゆかり ▶

平凡な女子高生だったが、不慮の事故で命を落とし、リリアナとして転生する。

ミーナ ▲

異世界で初めてできた、リリアナの友達。

リリアナ ▲

前世の記憶を持って生まれた少女。ちょびり不便な異世界の暮らしを豊かにしようと、奮闘する。

登場人物
紹介

目次

えっ？ 平凡ですよ??

7

おもしろい

281

えっ?
平凡ですよ??

第一章 豊穰の娘と村娘

私の名前は、橘ゆかり。公立高校に通う普通の女子高生です。我が家は母子家庭。お父さんは、私がお母さんのお腹なかにいるときに交通事故で亡くなった。お母さんはショックを受けて、流産しかけたそうだ。

だけど、お母さんのまわりには優しい人達がいた。心配してくれた親族や友人、職場の人達。なにより、お母さんのお腹の中には私わたしがいて、いつも一緒だった。

お母さんは人の優しさに触れ、徐々に生きる気力を取り戻し、私を産んだ。そして、素敵な名前をつけてくれた。

——ゆかり——

私がお母さんのもとに生まれてきたのも、運命という名の縁ゆかり。

人と人との縁を大切にしてほしい、と願いを込めてつけられた名前。

ちよつと照れくさそうに話してくれたよね。ありがとう。そして、ごめんなさい。

私、似なくてもいいところが、お父さんに似てしまったのかな。

私は今日、車に轢ひかれた。

どうか、またお母さんに人の縁が集まりますように。一人じゃないと気づきますように。

薄れゆく意識の中、私はお母さんの幸せをなによりも願った。

それが、橘ゆかりとしての最期さいごの記憶。



私の名前は、リアナ・ラ・オリヴィリア。

そして、私には過去にもう一つ名前がありました。

——橘ゆかり——

交通事故によりその生を終え、今はリアナという名前の少女として生きています。

転生——つまり、別の存在に生まれ変わったようです。

橘ゆかりだった頃の記憶を持ったまま。

しかも、ここは地球ではなく異世界。

この世界に生まれたばかりの頃は現実を受け止められず、ただただ泣き喚わめいていたけれど、泣いても現実が変わらなかつた。そうなると、赤ん坊でも自然と腹はらを括くくるもの。

それに私が泣き喚わめいているとき、こちらの世界のお父様やお母様は、オロオロした様子で私を抱きしめてくれた。頭あたまを優しく撫なでてくれた。そんなことされたら、ほだされるに決まっている。

いつしか私は転生を、新たなる生の始まりを受け入れるようになった。

だけど、赤ちゃんライフは元・十六歳には辛かったです。こればかりは受け入れがたかった。回想は断固拒否。羞恥プレイ連続の葬り去りたい過去です。

そして、なにより苦労したのは言葉。この世界の言葉は、赤ん坊ながらすでに日本語であれこれ考えていた私には、外国語にしか聞こえませんでした。文字もまた一緒。

そう、地球とは違う言語が使用されていたんです。だから、柔軟な子供の脳をもってしても、なかなか喋れなかった。前世の記憶があったために生じた弊害。

心配したお父様やお母様は、私にいっぱい話しかけてくれました。

そのせいか、知恵熱とはずっとお友達だったよ。言葉の使い方が違うって？ うん、頭を使いすぎて知恵熱が出た、なんて冗談で言ったりするけれど、本来の意味は違う。知恵がつき始めた、乳児の頃の発熱が知恵熱なんだよね。だけど、私の場合は間違いない頭の使いすぎによる発熱。

とはいえ成長するにつれて、バラバラだった言葉の音と意味がくっついていき、それは知識となっていく。

そうして、七歳でようやく言葉と文字を完璧にマスターしました。

よく頑張ったよ、私。

その頃になって、私はやっと自分の立場が分かるようになりました。

なんと私、貴族、それも伯爵家の娘として生まれたみたいです！

しかし、そのわりにはポロい我が家。その原因は、両親にありました。

今世での私の両親は、二人揃ってかなりのお人好しでした。

あるときは、商売をしたいが元手がないという青年に借借書もなしにお金を貸し、持ち逃げされてしまった。またあるときは、怪しげな商人に良い話があるから出資してみないかと言われ、素直に出資して大損してしまった、などなど。

学習能力ありますか、とツッコミたい。

私の両親は、見た目も性格も良くて、堅実。なのにお人好しな気質がそうさせるのか、少し考えれば分かる嘘もすぐに信じてしまう。おかげで豊かな領地を持ちながら、我が家の家計は常に火の車。

けれど、私はそんなお人好しな両親を嫌いじゃない。むしろ大好き。

最低限しかいない我が家の使用人の噂話を盗み聞きしたところ、貴族という身分の人は大概、人を人とも思わないらしい。それを聞いて、すごく驚いた。私が前世で暮らしていた世界は、人が平等なのは当たり前だったから。身分で人を差別することが多いこの世界で、どんな人でも当然のように人として扱い、対等な視線をもって接する両親を誇らしく思う。

さらに、両親は領民のことを第一に考え、彼らの生活が豊かになるよう、入ってきたお金のほとんどを領地につきこんでいる。

お父様は領地の視察を毎日欠かさず行い、時には畑まで耕す。

お母様も、貴族の奥様は普通、掃除洗濯なんてしないのに、毎日家事をする。

そして、二人はたくさんの愛情を私に注いでくれる。

子供としては、そんな両親のお手伝いをしたいじゃない？

この世界の文化レベルは、中世ヨーロッパのようなイメージ。生活の上で、たまに不便を感じることもある。だから、私がこうして前世の記憶を持って生まれたのも、意味があつてのことだと思つている。なにかしらの役に立つと思うんだ、私の持つている知識が。

前世では親孝行できなかった私。

元・日本人としての知識、愛する両親のために活用させていただきます！



今日は、フィリアという農村にお邪魔しています。なぜかつて？

先日、親孝行すると意気込んだのはいいけれど、なにから手をつけなければいいのか分からなかったためです……

そして今さらですが、私はこれまで家から出たことがありませんでした。家のまわりで遊んだり、庭を探検したりはしましたよ。だけど、それ以上遠くへ出かけたことはなかったんです。なにせ、言葉を習得するのに必死でしたから。

そんな私は、この世界の歴史や情勢を知りません。

何をするにも、まずは現状の把握が必須じゃない？

そこで、領地の視察に行くお父様に、私も行きたいとおねだりしてみました。

「リリアナ、遊びに行くんじゃないよ？」

お父様の弱点など、この七年でお見通しだ。くらえ、私の必殺技を——！

目を潤ませながらお父様を見上げ、首を傾げ、指を組んで顎の下に添える。このお願い攻撃のおかげで、私は未だに負け知らず。もちろん、私の不敗神話は更新されました。我ながら将来が恐ろしい。

今日の視察は、家から一番近い農村、フィリア村。

そんな遠くないので、お父様と一緒に馬に乗せてもらい、ゆつくりやつてきました。

同行者は、騎士のアレスさんです。

アレスさんは飄々とした雰囲気のお兄さんで、お父様の補佐官でもある。

さて、そのフィリア村ですが、ここは森に囲まれた長閑な農村で、民家も三十軒ほどしかありません。お父様は、その中でも一番大きな家の扉を叩きます。

「ようこそお出でくださいました、領主様にアレス殿。今日は随分と可愛いお連れ様も一緒にですね」

人の良さそうな、朗らかな男性が扉から現れました。

「お久しぶりです、ダグラス村長。今日は、娘のリリアナと一緒にいきたいと駄々をこねまして。

リリアナ、彼はこのフィリア村の村長、ダグラスさんだよ」

「はじめましてダグラス村長さん、リリアナです。今日はよろしくお願いたします」

村長さんは、私にも笑顔で応じてくれた。

お父様と領民の関係はどうなのだろうと気になっていただけ、取り越し苦労だったみたい。

まあ、お人好しのお父様だもんね。

「視察はお嬢様には退屈でしょう。私の娘と一緒に遊んでいただけませんか？ 娘もリリアナお嬢様と同じ年なのですよ。この村には、娘と同じ年頃の子がいないので喜ぶでしょう」

村長さんはそう言うのと、家の奥から一人の少女を連れてきた。チョコレート色の髪に、同色のくりっとした大きな瞳が可愛らしい。だけど、人見知りをするタイプだったみたい。私を見ると、俯うつむいて固まってしまった。

「はじめまして、リリアナと言います。あなたのお名前は？」

私が尋ねると、少女は弾かれたように顔を上げ、頬ほを染めて笑みを浮かべる。

なに、この可愛い小動物。ぜひともお持ち帰りしたいよ。

「私の名前は、ミーナって言います」

「ミーナちゃん、私と一緒に遊んでくれる？」

二人でご挨拶あいさつしていたら、じゃあいい子にしているんだよ、と言ってお父様とアレスさん、村長さんは視察に行ってしまった。一方ミーナちゃんは、私を家の中へ引っ張っていく。

あれっ、私なんのために来たんだっけ？

「リリアナ様、なにして遊ぶ？」

「ミーナちゃん、様なんてやめて。リリアナと呼んでよ」

「でも、お父さんがリリアナ様とお呼びしなさい、って言ってたもん」

「私が良いと言っているんだから、これからはリリアナと呼んでね。私はミーナちゃんと呼ぶ

から」

そう言うのとミーナちゃんはうれしそうに私の両手を握り、リリアナちゃんにして遊ぶ？ とニコニコしながら聞いてくる。かくれんぼはもつと大人数の方が楽しいし、トランプをやるにもこの世界にはおそろくトランプなんてないし、さてどうしよう……

結局、あやとりにしました。自分の発想力のなさにげんなりです。それでも、あやとりは初めてだと言って、ミーナちゃんは楽しそうに遊んでいる。良い子だよ。

「ミーナちゃん、この村の人達は畑を耕して生活しているの？」

「うん。獵師りようしのおじさんもいるけど、畑で野菜を育ててる人の方がいっぱいだよ、リリアナちゃん」

まだ慣れないあやとりと格闘しながら、ミーナちゃんが答えてくれる。

「森に囲まれているから、腐葉土ふようどもたくさんありそうだもんね。作物を育てるのに良さそう」

「フヨウド？ リリアナちゃん、なにそれ？」

「森に入ったとき、落ち葉の下が黒い土になっていない？ その黒い土をね、腐葉土ふようどというの」

そうなんだ、とミーナちゃんは相槌あいきちをうつ。

「落ち葉なんか腐った土なんだよ。あとは灰も畑に良いの」

……確かそうだったはず。

「リリアナちゃんは物知りなんだね」

ミーナちゃんは、キラキラした目で私を見つめる。

そんな純粋な目で見られたら、間違ってるかもしれないだなんて言えないよ。それから二人であやとりに熱中していたら、いつの間にか大人達が帰ってきていました。

「リアナ、そろそろ帰るよ」

お父様が私を連れて帰ろうとしたら、ミーナちゃんの大きな瞳から大粒の涙がこぼれ始める。

「リアナちゃん、帰っちゃいやあ!」

なんて可愛いことを言うの、ミーナちゃん。やっぱりお持ち帰りしたいな。

「ミーナちゃん、泣かないで。お父様と一緒に、また遊びにくるから」

私がそう言ってミーナちゃんに抱きつくと、ミーナちゃんは頬を真っ赤に染めて、瞳を潤ませる。

「リアナちゃん、また私と遊んでくれるの?」

「うん。もちろん!」

「じゃあ、私とリアナちゃんはお友達だね!」

ミーナちゃんは、また遊びに来てね、と名残惜しそうにしながら、ダグラス村長さんと一緒に村の入口まで見送ってくれた。

今日、今世で初めての友達ができました。



私の名前は、ミーナ・フィルアです。

お父さんはフィルア村の村長をしています。うちは代々続く村長の家系なんだって。

そんな我が家に、今日は素敵なお客様が来たの。

一人は領主様。とても優しい人で、今の領主様になって良かったって皆が言ってるの。前の領主様は、恐ろしい人だったんだって。今の領主様は私に時々お菓子をくれるの。そんな人が悪い人なわけないもんね。それから、領主様を守る騎士様も一緒に来た。ここまではいつもの顔ぶれ。だけど、お客様はもう一人いたの。

「今日はね、リアナちゃんとお友達になったの!」

私は初めて同じ年のお友達と遊んだ興奮が冷めず、夕食の席で今日のことをお父さんとお母さんに語った。

「リアナちゃんはね、真っ白な肌にサラサラの銀髪なの。それとね、瞳が吸いこまれそうなほど綺麗な紫水晶の色なの。私、あんまり綺麗だから感動しちゃった」

豆のスープを木の匙ですくっても私のお喋りはなかなか止まらず、スープは皿の上にポタポタと落ちていく。

はじめはお父さんとお母さんも注意してきたけど、もう諦めたみたい。今は私の話をうんうん、と言いながら聞いている。だから、リアナちゃんの自慢話をいっぱいしているの。

「それにね、リアナちゃんは物知りさんなんだよ。腐葉土や灰が畑にいいんだって知ってた?」すると、お父さんとお母さんは首を傾げた。

「フヨウド?」

「お父さんもお母さんも知らないの？」

いつもはお父さんやお母さんに聞いてばかりの私。だから逆に教えてあげられることがうれしくって、リリアナちゃんの言っただけをそのまま伝えたんだ。そしたらお父さんは、試してみる価値はあるな、とブツブツ言いながら考え始めちゃった。つまらない。まだまだリリアナちゃんの話聞いてほしいのに。

それから数ヶ月して――

昨日、お父さんが凄くウキウキして帰ってきたの。リリアナちゃんの話をした次の日、お父さんはさっそく使っていない畑の一部に、腐葉土ふようどや灰を撒まいて作物を植えてみたんだって。そしたら、作物の成長速度は早いし、他の畑のものより大きく育っていて、収穫量がすごく増えそうだって、喜んで話してくれた。これからは他の畑でも試してみて、良い結果が出たら村の畑のすべてに使おうって。

そして今日、リリアナちゃんが村に遊びにきてくれたから、その話をしたの。リリアナちゃんはなぜかほっとしてた。なんでだろう？



後に、腐葉土と灰はミーナの住むフィルア村の畑すべてに使用され、その年の収穫量は過去最大となった。

領主はオリヴィリア領すべての村にその方法を広め、オリヴィリア領はいつしか国の食糧庫と呼ばれるようになった。

領主の娘であるオリヴィリア伯爵令嬢も、いつしか『豊穰ほうじょうの娘』として広く知られるようになる。

そして、数多あまたの伝説を残すリリアナ・ラ・オリヴィリアには、生涯しょうがの友がいた。

その生涯の友こそ、ミーナ・フィルアという。

もう少しで、私は八歳になります。

数日後に内輪の誕生日パーティーをすることになり、友達のみいなちゃんも来てくれるそうです。ただ、心配なことがあります。最近、お母様の体調が良くないんです……

いつも眠そうだし、身体もだるいみたい。

治療師、つまりこちらの世界での医者に診てもらったら、しばらくこの状態が続くので、無理をせず安静に、と言われたそうです。だから誕生日パーティーも今年はしなくていいかな、と思っていたんだけど、リアナちゃんがまた一つ大人になったおめでたい日なんだから絶対にやるのよ、とお母様に凄く剣幕で言われてしまいました。

我が家は貴族ですが、貧乏なのでお母様も家事をします。数少ない使用人をまとめあげ、指示をする。手があげば、手間どっている人を手伝ったりして、なにかと働くお母様。

そのお母様が動けない今、私が働かずして誰が働く！

私は、家事のお手伝いをするにしました。もともとちよつとしたお手伝いはしてきたのだけれど、子供は危ないからダメ、とそれ以上させてもらえなかったんだよね。でも前世ではお母さんがバリバリに働いていたから、必然的に私が家のことをやっていたんです。だから家事には自信が

ありますよ。

そして、私にはなんとしてもチャレンジしたいことがありました。それは料理。

この世界の献立は、パンに、豆や野菜のスープのセットが基本。これに、ソースを添えた焼き肉、チーズやソーセージ、オムレツなどがプラスされる。

だけどね、日本で当たり前のようにたくさん料理を食していた私としては、もうちよつとバリエーションが欲しい。うれしいことに、こちらの食材は地球と同じ形状と味で、町のお店に行けば簡単に手に入る。時期や産地の問題があるから、スーパーマーケットのように旬じゃない食材は手に入らないんだけど。そこまで高望みしてはダメですよ。でも残念。

こちらの世界にも、焼く、煮る、茹でる、炒める、和える、漬けるといった調理法はあるんだよ。だけど、調理法ってまだまだあるよね。いぶすとか、干すとか。今回は、蒸すに挑戦したいと思います。

前から料理にチャレンジしたかったけれど、子供の私は調理場に立ち入り禁止だった。なので、料理長さんにレシピを渡して、これを作ってほしいの、とお願いしたことがある。

そしたら、問題発生。作り方はまだしも、計量カップやらの調理器具がないから、食材の分量が伝わらなくて作れない。

料理のレシピによく書かれている『少々』ってどれくらいだと思っ？

正解は、親指とひとさし指の二本の指先で自然につまんだくらいの量なのだけど、これと同じような疑問がすべての食材につきまとうのだから、難しいよね。食材を無駄にってしまうのももった

いないので、結局作ってもらうのを諦めたんだ。料理長さんも申し訳なさそうで、罪悪感でいつぱいになってしまったのは苦い思い出。

「だけど、ようやくリベンジの時間が巡ってきたようですね。」

人間の三大欲求の一つをなめてもらっては困ります。もちろん、満たしてみせましょう。分量についてはひとまずおいといて、お父様に必殺技を放ち、作ってほしいものがあるの、とおねだりをしました。勝敗は予想通りだよ。ごめん、お父様。でも、これも豊かな食生活のためのよ。

本日、そうして出来上がった調理器具を、ようやくお披露目できます。子供の私がすべての調理器具を運ぶのは大変なので、すでに調理場に運んでもらっています。

ウキウキしながら調理場に行くと、料理長さんは心配そうに尋ねてきた。

「お嬢様、ここは火や包丁を使う場所なので危険です。私に任せてはいただけませんか？」

「料理長さん、私は危ないことをするつもりはありません。今、お母様は体調が悪く臥せています。だけど、幸いにも食欲はいつも通りです。美味しい料理を食べて、早く元気になってほしい……そのお手伝いがしたいの。ダメ？」

しゅんとした様子で、料理長さんを涙目で見上げる。

「それに、一人でも多くの手があった方がお仕事も早いでしょう？　ねっ、お願い！」

「うっ……ご自分で火や包丁を使ったりしないとお約束していただければ、承知いたします」

「分かりました。ありがとうございます！」

私はお礼を言って、調理台の前の手頃な踏み台の上に乗る。すると、料理長さんが私の恰好をまじまじと見つめてきた。

「その布はなんですか？」

私は服の上に重ねた、あるものをつまむ。

「エプロンです。衣服が汚れないように着るものですよ」

なにせ、我が家は貧乏一家。服なんて数着しかないんですからね。だから作っちゃいましたよ。「へえ、それは便利そうですね」

そう言って、料理長さんはまじまじと見てくる。そんなに気に入ったのなら、感謝のしるしに今度料理長さんにも作ってあげよう。そんなことを思いながら、調理台の上に広げられた調理器具とレシピを確認する。

思い返せば、レシピ作りはとでも大変でした。この世界にも秤はあるのですが、前世とは異なる単位のおもりを使っただけです。各料理に必要な材料を、そのおもりで一つずつはかってレシピに書きこんでいったんだけど……気の遠くなる作業だったよ。

「今日のお昼の献立は、中華まん、中華まん、シューマイ。あとは野菜炒めです。この調理器具とレシピさえあれば、誰にでも美味しい料理を作ることができます。この紙に書かれた調理法を読んで、きちんと中華まん、シューマイの生地は作れましたか？」

私が用意したレシピでちゃんと料理ができるか知りたかったので、料理長さんにはあらかじめ生

地の作成をお願いしてたんです。子供の力だと時間もかかるし、中華まんの生地は発酵のために寝かせる必要があったからね。

前もって献立を伝えたとき、野菜炒めについては作ったことがあるということ。料理長さんもすぐに了承してくれた。だけど、中華まんにシューマイという初めて耳にする料理には、凄く不安そうだった。そこを、絶対に美味しいのよ、お願い、と説得してなんとか生地作りに挑んでももらいました。感謝しています、料理長さん。

「これが頼まれていた生地です」

差し出された二つの器には、中華まんとシューマイの生地がそれぞれ塊で入っていた。うん、分量もバツチリ。レシピを見ただけで、きちんと生地が作れている。良かった。

本来、中華まんの生地には砂糖を入れるのだけれど、今回は砂糖不使用で作ってもらいました。砂糖がなくても、きちんと生地は作れるんです。なぜ砂糖不使用なのか、つつこんではいけません。我が家は貧乏なのです。貧乏って、悲しいね……

ダメ、忘れるの、リアアナ。さあ、気合いをいれて作らなくては！

「ありがとうございます。私はシューマイを作るので、料理長さんは中華まんをお願いします」

「かしこまりました」

私は目の前の生地を同じくらいの大きさにちぎって並べ、乾燥を防ぐため、濡れ布巾をかけた。このちぎった生地を布巾の下から一つ手に取り、たつぷりと打ち粉を振って、麺棒で円形にうすく伸ばす。これで、シューマイの皮が一枚完成。できた皮にも、乾燥しないように濡れ布巾をかける。

こうして地道に作業を繰り返し、皮を増やしていく。

料理長さんはレシピを見ながら、中華まんとシューマイの具も作っている。具の食材を切るのに包丁を使うからって、仕事を一つとられたんです。約束だから仕方がないけれど。

ふう、皮完成。たったこれだけでも、私の年齢だと結構大変だね。

私は顔に粉がつかないように、右腕で額の汗を拭く。

「お嬢様、シューマイの具ができました」

タイミンが良く、料理長さんがシューマイの具が入った器を持ってきてくれる。

「ありがとうございます」

私に器を渡すと、料理長さんはすぐに自分の仕事に戻り、てきぱきと仕事をこなしていく。さすがは我が家の少数精鋭部隊の一人。仕事ができますね。さて、具を包みますか。

私は左手の親指とひとさし指で輪を作り、シューマイの皮をのせて真ん中をへこませ、巾着のようにした。そのへこみに具をたつぷりと入れて、表面を平らに整える。

具を包んでいく作業は最初は楽しいけれど、量があると飽きてきて辛いよね。いやいや、そんなことを考えちゃいけない。考えれば考えるほど、辛くなるに違いないから。

私は雑念を捨てて、作業に集中した。そうして、ようやく目の前にたくさんシューマイ群が完成した。

うん、頑張った。私は誇らしげに胸を張る。

料理長さんのほうを見ると、蒸籠で大量の中華まんを蒸す作業に入っていた。

蒸籠もお父様にお願いで、きちんと作ってもらいましたよ。

私は別の蒸籠を持ってきて、皮がくっつかないように下に軽く油を塗ってからシウマイをすべて並べる。

「料理長さん、シウマイも蒸してもらえますか」

蒸すのも火を使うからね。残念ながら、私ができるのはここまで。野菜炒めにいたっては、野菜を洗うくらいしか許されていないもんね。

「お嬢様、あとは私がやります。こちらは順に蒸していくだけですし、その合間に野菜炒めもできます。どうぞ、お部屋でお待ちください」

「片付けくらいやりますよ。それをお願いした立場としては、最後まで見届けたいですし」

結局、危ないからという理由で片付けもさせてもらえず、その後は調理場で料理長さんに初めての調理器具の感想を聞きながら過ごした。

料理長さんにとって蒸すという調理法が斬新だったらしく、食べるのが楽しみだと言ってくれた。「よし、そろそろ蒸し上がります。料理をお母様の部屋に運んでください」

我が家は、食事は家族全員で、がルール。最近では、臥せているお母様の部屋に料理を運び、家族三人で食事をしている。昼食は、お父様が視察で不在のときもあるけれど、今日は一緒にいたけると朝に確認済みです。

「かしこまりました。奥方様も、お嬢様の料理ですぐお元気になるに違いありません」

「ありがとうございます。今日の料理の感想、あとで聞かせてくださいね」

この料理を食べるのは、私達家族だけではない。使用人と、賦役として領主の畑を耕している領民にも配られる。だから、献立を考えるとき、配りやすい中華まんにしたんだよね。量はてんこ盛り。皆の感想が楽しみだな。

調理場を出て、そのままお母様の部屋にウキウキしながら向かうと、部屋にはすでにお父様がいて、イチヤツついていた。いつものことなので、躊躇いなく私も二人に抱きつきませす。

しばらくすると、料理が運ばれてきた。蒸籠の蓋を外すと湯気が立ち上がり、美味しそうな匂いがたただよう。

初めて見る料理に、お父様とお母様も興味津々。あとはお茶があれば飲茶っぽいのに。こちらの世界には、お茶や紅茶がないんだよね。飲み物も、いつかバリエーションを増やしたいな。

「お父様、お母様、今日の料理は私が考えました。大きいほうが中華まん、ちっちゃいほうがシウマイです。湯気を利用した、蒸すという調理法に挑戦してみました。あとは野菜炒めです。感想、聞かせてくださいね」

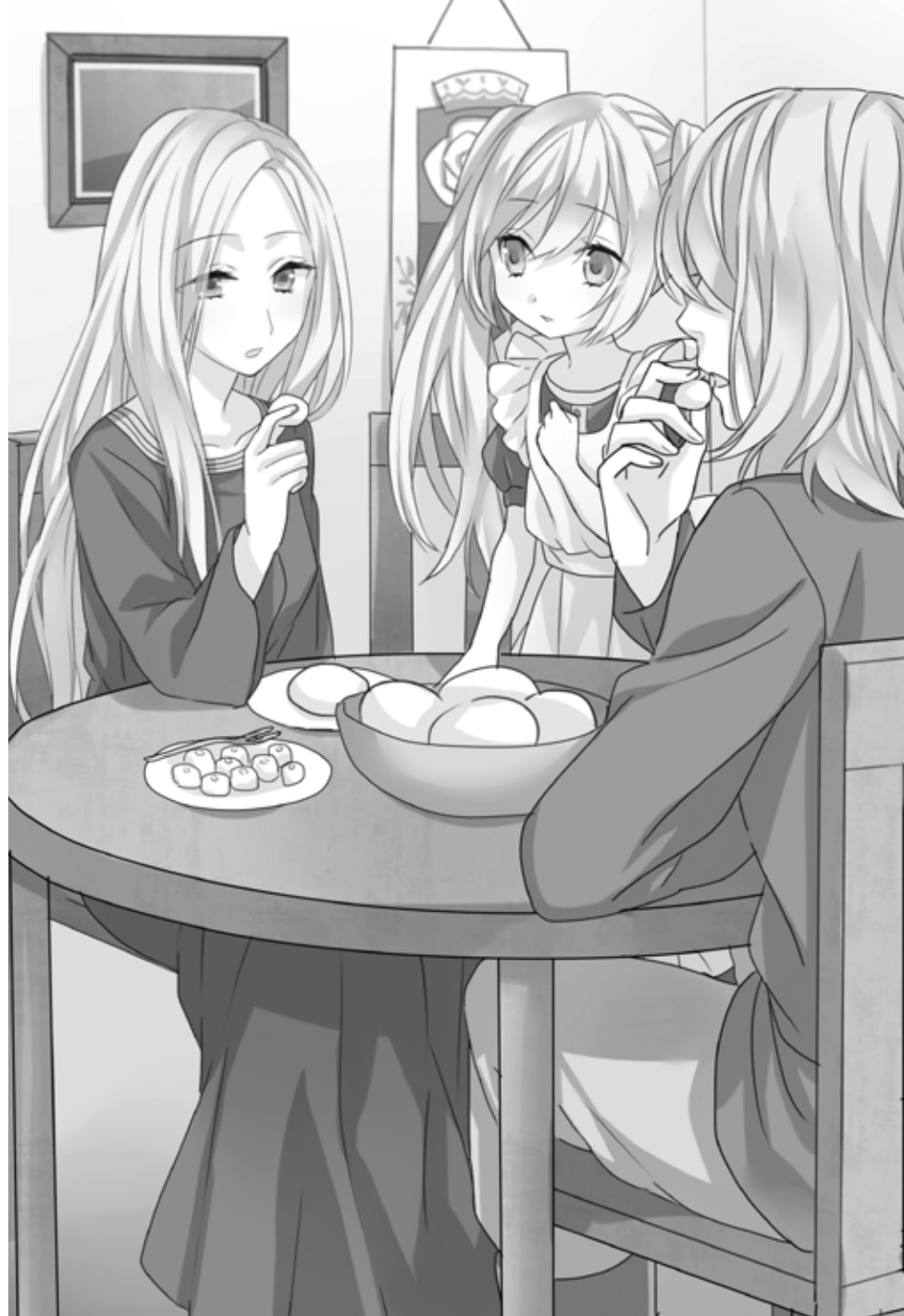
「リアナちゃんの考えた料理ですって、それは楽しみだわ」

「お母様のかわりにリアナは頑張ったんだね。お疲れ様。では、森の実に感謝していただきます」

「ありがとうございます、リアナちゃん。森の実に感謝いたします」

「喜んでもらえて良かったです。森の実に感謝いたします」

こちらでの「いただきます」を言って、二人はまず中華まんを一口サイズに手でちぎって食べる。



多分、パンの仲間だと思ってるんだろうな。

じっと見ていると、お父様とお母様の動きが一瞬止まる。けどすぐに、二人はもくもくとまた食べ始めた。

もしかして不味いのかな。私は、おそろおそろ中華まんを口に入れる。

うん、中華まんだよ。具だくさんで食べごたえがあるし、なにより中に入れたチーズがとけて、

食材とのハーモニーも絶妙。

なのになぜ、この二人は無言なの。前世での料理は、こっちの人達の口に合わないの？

「お父様、お母様。お口に合いませんでしたか？ ごめんなさい……」

そこでようやく二人は顔を上げ、私を見てくれた。その表情はやけにイキイキしている。

「リリアナは天才だね。この料理、凄く美味しいよ！ 具を包んでいる生地もふつくら、しっとりだね」

「リリアナちゃん、これは料理の革命よ！ 新たな食の歴史が刻まれたわ」

「お口に合ったようで良かったです。シウマイもぜひ召し上がってください」

お父様とお母様に、今度はシウマイをすすめる。二人はシウマイを不思議そうに眺めたあと、フォークで刺して口に入れた。

「とってもジューシーで美味しいわね」

「食べた途端、口の中に肉汁が広がるね。旨味が凝縮されている」

うふふ、そうですね。蒸すと形が崩れにくいし、風味をそこなわれないから、素材の味を活かす

と頼んでいたらしい。

「リリアナちゃん、お誕生日おめでとう。弟か妹ができるんだね。奥方様も、病氣じゃなくなつて良かったね」

誕生日パーティーに来てくれたミーナちゃんは、私の手を握りながら一緒に喜んでくれる。

「あれ、リリアナちゃん。手に傷があるよ」

「ああ、料理したときに包丁でちよつと切っちゃったの」

実は料理長さんの目を盗んで包丁を使っていたんです。もちろんバレないようにすぐ隠しましたよ。まあ、小さな切り傷だし、すぐ治るよね。でも、前世で主婦を自認していたのに、怪我をするなんて……

ミーナちゃんを見ると、まるで自分が傷ついたように、悲しい顔をしていた。

「リリアナちゃん、私が治してあげるね。我願う、リリアナちゃんの傷を治したまえ」

傷ついた手の上にミーナちゃんの手がかざされると、ほのかな温もりを感じた。

しばらくして、手がどかされ……

私の手の傷は、すっかり消えていました。

「えええー！ー！ー！」

ミーナちゃん、私になにをした！ー！ー！ー！



私の名前は、マリア・シェリスタ。

はつきり言おう、偽名です。本当の名前は、マリア・リーシェリ。

今では大きな組織に発展したリーシェリ商会の末娘として生を受け、数奇な運命により、王都ローレリアにて食堂を営み生計を立てている。

リーシェリ商会を束ねる父さんには家を出るとき勘当され、そのまま私は行方をくらませた。あれからもう三十二年。今では、立派な食堂のおばちゃんだ。

生家とは、家を出てから連絡をとっていなかったが、数年前に私の居所を掴んだ兄さんは、時々私のもとを訪れる。

「お久しぶりね、兄さん。元気そうでなによりだわ」

この日やってきた兄さんは、手に持っていた大きな箱を私の前の机に置いた。

「マリアも元気そうで良かった。これは、頼まれ物だ」

「兄さん、いつもすまないわね。様子はどうかだったかしら？」

「担当の話によると、幸せにやっているとらしい。誰に似たのか、お人好しすぎてどうなることやらと心配していたが」

「うふふ、それは良かったわ。それにしても随分と大きい箱ね。なにが入っているのかしら」

私は、ゆっくり目の前の箱を開く。

そこには見たこともない道具と紙の束がひとつ、そして一通の手紙が入っていた。

「兄さん、なにかしらこれ？」

「なにかの道具みたいだが、やけにたくさんあるな。マリア、手紙を読んでみたらどうだ」

私は箱から手紙を抜きとり、開封する。

便箋には、手離さなければならなかった息子の、懐かしい字が並んでいた。

母さん、久しぶりだね。

商会から母さんの手紙を預かったよ。相変わらず元気そうだなによりだ。

だからといって、無理して身体を壊したりしないでくれよ。

最近、妻が体調を崩して臥せていたんだ。

可愛い天使は心配して、お母様のためにと家事の手伝いをしていたよ。

特に料理への入れこみようは凄かった。見たこともない道具を作ってほしいと言うので作らせて

みたら、それは調理器具だと言うんだ。

さっそくその調理器具を使って、料理長と一緒に天使は料理を作ったよ。

正直、不味くても全部食べなければと覚悟していた。

それがどうだろう。今まで母さんの作った料理が一番だと思っていたが、天使の料理は素晴らしい美味しくて、寝るのも忘れて夢中で食べてしまったよ。料理上手は母さんに似たんだろうね。

私達夫婦はもちろん、この料理を食べた賦役の領民や使用人も感激して、神々の料理だと絶賛していたよ。この絶品料理を目当てに、賦役の領民達は今まで以上に耕作に励み、賦役の日を楽しみ

にする者まで出てくる始末。

使用人は暇さえあれば調理場に通り、料理を教わっている。

自分達の家族にも美味しい料理を食べさせたいと、必死になっただ。

そんな状況を知った天使は、使用人にレシピと調理器具をあげたんだ。

いつも仕事を頑張ってくれている御礼として。

レシピというのは調理法を記した紙で、それを見ながら天使の調理器具を使って料理をすると、誰にでも美味しい料理ができるらしい。

母さんにもその料理を味わってほしくて、箱の中にレシピと調理器具を入れておいたよ。

他にもエプロンという衣服の汚れを防ぐ前掛けや、四本の歯がついたフォークが欲しいと言うから、作らせてみた。使用して、ぜひ感想を聞かせてほしい。

それから、妻の体調が悪いと書いただろう。天使の誕生日に、妻は最高の贈り物をあげたんだ。

なんと、天使に弟か妹ができるって言うんだ。来年には私達の天使がもう一人増えて、天使達になる。母さんにも、いつか天使達を見せたいよ。

読み終えると、兄さんがハンカチを用意してくれていた。

息子からの手紙を読むときには、いつも涙が出てしまう。

「マリアは本当に涙もろいな」

「あら、これはうれし泣きだからとても幸せなことなのよ。素晴らしいことに、来年にはもう一人

天使が増えるらしいわ」

「もう一人生まれるのか。それはめでたいな。マリア、もう会ってもいいんじゃないのか？ あのとときは状況が違う」

私はハンカチで目元を拭いながら、首を横に振る。

「ダメ。私はあの子を最後まで守れなかったんだから、会う資格なんか無いの。そもそも、私のような平民と血の繋がりがあると分かっているといけない。本来は、手紙のやり取りすらするべきではないのに」

だけど、つい息子と兄さんの好意に甘えてしまっている。少しでも繋がりを持つとうとする自分が浅ましい。

「ところでこの道具はなんだったんだ、マリア？」

兄さんは私の梃子でも動かない決意を察し、重い雰囲気を持ち直すように言った。

まあ、もともと気になっていたのでしょう。商人の悲しい性ね。

「この道具は調理器具で、紙の束はレシピという調理法を記したものらしいわ。この調理器具やレシピは、天使が考えたんですって。この通りに作ったら、天使が作った味を再現できるらしいわ」

「この道具は調理器具だったのか。でも、子供の考えたものだろう」

「兄さん、馬鹿にしてるの？ 向こうの使用人や領民達は、天使の料理を神々の料理と呼んでいるらしいわよ」

「それは聞き捨てならないな。マリア、そのレシピとやらから、なにか作ってくれよ」

「もう、仕方がないわね」

天使が作ったレシピの束の中から、『野菜天ぷら』と書かれたものを抜きとる。

野菜はお好みで良いようだし、これだったら今ここにある食材で事足りるわね。

私はさっそくエプロンを着け、調理に取りかかった。美味しくするコツは、小麦に水だけでなく卵も入れて衣を作ること。食材、衣に使う水や卵は、冷えていた方がさっくり美味しく仕上がると書かれていた。私は天使の料理の味を再現するために、レシピに忠実に調理をしていく。すべての食材を揚げ終え、料理を盛りつけて兄さんの前に皿を置く。

皿の隣には、天使が考案したという四本歯のフォークを置いた。

「これが兄さんの分ね。森の実りに感謝いたします」

「黄色くてふわふわした見た目だが、意外とパリッとした料理なんだな。森の実りに感謝いたします」

兄さんはお行儀悪く、天ぷらをフォークでツンツンとつつき、それからゆっくりと口に運んだ。

私も早く天使の料理を味わわなければと、天ぷらを口に入れる。

口にした瞬間、二人して動きをとめ、思わず叫んでしまった。

「美味しー！」

「おい、マリア。これは確かに神々の食卓の料理だ。こんなに旨い物は初めて食べた！」

「これは、神々の慈悲だわ。まさに、天使が私達のもとへ授けてくださった料理ね！」

初めて食べるサクサクとした食感とその美味しさに二人して感動した。

「レシピ通りに作れば、こんなに美味しい料理ができるのか」

「手紙通りだしたら、そういうことになるわね」

「これは、王国中に広めるべき料理だ。このレシピと調理器具さえあれば、この味を楽しめるなんて素晴らしい。それにこのフォーク！ 歯が四本あると、食材を刺したときに安定感がある」

「こんな単純なこと、どうして今まで思いつかなかったのかしら。この方が実用性があるわね」

私は右手に持ったフォークを感嘆の思いで、まじまじと見つめる。

「マリア、このレシピと調理器具、フォークをぜひ商会で販売したい」

兄さんの商魂が刺激されたらしい。こんな絶品料理が誰にでも作れるのだから、売りに出せば絶対に大繁盛だ。

可愛い天使には、素晴らしい才能があるのだろう。息子達が天使を優しく見守り、幸せに暮らしていることは、手紙からもよく伝わってくる。

しかし、私は噂で知っている。

彼の領地経営が火の車であること、苦しみや悩みの種も少なくはないこと。

息子には事後承諾になるが、兄さんに販売の許可を出した。もちろん、利益の半分は彼の領地に納めることを約束させた。私だって、人の親だしね。

それからの兄さんの行動は早かった。調理器具とレシピを私から借りると、それを見本にしてすぐ生産にかかった。さすがは、王国中にリーシェリ商会の名を鳴り響かせた立役者の一人。

やがてレシピは『贈り物』という題名の書物となり、調理器具と一緒に販売された。すでに商会

の傘下の食堂では天使の料理が提供されて話題となっていたため、レシピと調理器具は即日完売。大量生産するも追いつかず、評判は高まるばかりだ。

予想外だったのは、エプロン。服が汚れるのを防ぐ作業衣だったのに、どういうわけか、若い娘達の流行服として一世を風靡することになった。



後に、王国のあらゆる家庭に天使の料理は浸透し、ついには王宮でも供されるようになった。各国の賓客はその料理に舌鼓をうち、評判は国外へも広まっていった。

マリア・リーシェリが営む食堂でも、天使の料理は毎日提供された。

そして、料理を口にした客は口を揃えて言ったという。

「マリア、こんなに美味しい物は食べたことがない！」

すると、マリアもまた、決まってこう答えた。

「当たり前よ、可愛い天使が考えたのだから」

仰天ニュースです。なんと、この世界には魔法がありました。

「凄いよ、ミーナちゃんにしたの？ まるで魔法みたい！」

ミーナちゃんが私の傷を治したのに驚いて、思わず大きな声をあげた。

「もちろん魔法だよ」

ミーナちゃんは頷くと、当たり前のように言った。

「凄い、凄いよ！ じゃあ、魔法で空を飛んだり、変身したりすることもできるの？」

私は興奮状態。誰しも一度は、おとぎ話やファンタジー小説を読んで魔法が使えたらなあと思ってたことあるでしょう？ それが実際に使えるなんて、凄すぎるよ。

「魔力が強い人なら空も飛べるんじゃないかな。それぞれ得意不得意はあるけど、変身したり、水や風を操ったりするくらいなら、みんなできると思うよ」

「じゃあ、私も空を飛んだり、ミーナちゃんみたいに傷を治したりできるかもしれないだね」

私はミーナちゃんの両手を掴んで、じりじりと詰め寄った。

「ねえねえ、どうやって使うの？ 私も使いたい！」

「リリアナちゃん、もしかして魔法のこと知らないの？」

ミーナちゃんが戸惑いながら言う。

その言葉を聞いた途端、興奮から一転、冷水をかけられたような気分おちに陥った。

この世界では、魔法は常識だったみたいです。前世では、魔法は空想の中だけの話だった。だから、そもそも魔法が使えるかどうかなんて、考えもしなかったんだ。私は、この世界のことをなにも知らない。

私は、伯爵家の娘として生を受けた身。貧乏伯爵家とはいえ、領民の働きによって、私は今の生活を享受きましている。だけど、私達のために領民がいるのではない。領民の暮らしを守るために、領地を治める私達、貴族がいる。なにも知らずに、誰かを守ることなどできるはずがない。

それが、高貴ノブレス・オブリージュなる者の義務だ。

だから、知らなかったではすまされない。知らないことは、罪なのだから。

私は両親の手助けをすると決めてから、この一年なにをしてきた？

ミーナちゃんと遊んだり、料理のレシピを書き出したりしてただけで、結局はなにもせず、毎日無駄に過ごしていた。このままではいけない。

その日は、豪雨ごううに襲われたこともあり、眠れない夜となった。

翌日、私は決意を胸に、お父様の書齋しよさいを訪ねた。

「お父様にお願ねがいがあります。私、勉強をしたいです。この世界のことを知りたいです」

「リリアナ、突然どうしたんだい？」

「お父様、私は自分がなにも知らないことを知りました。この世界に魔法があることすら知らなかったのです。恥ずかしいです」

しょんぼりしていると、お父様は微笑んで手招きをした。私は、お父様の座っている椅子に近寄る。

「じゃあ、家庭教師を雇おうか。リリアナは偉いよ。知らないことにきちんと気づいたのだから」
「お父様は優しすぎます」

お父様は、なにも知らないからそうやって優しい言葉をかけてくれる。本当は私、精神年齢はもう大人なんですよ。身体は子供だけだよ。

「でも、家庭教師なんて大丈夫なんですか？」

忘れてはいけないのは、我が家が貧乏だということ。

さりげなくお金の心配を口にして、お父様の表情をうかがう。

「リリアナは、そんな心配しなくていいんだよ」

「変な心配をしてごめんさい、お父様」

「いや、私こそリリアナに謝らなければならぬ。ごめんよ」

そう言うと、お父様は大きな手で私の頭を撫でた。前世ではこんな風に父親に頭を撫でられたことがなかったから、くすぐったい気持ちになる。

「ちようど、私の恩師のお弟子さんが、王都にいられなくなったから良い働き口はないかと相談されていたんだ。その人にリリアナの家庭教師を頼もう」

お父様、王都にいられなくなったって問題じゃないですか。

家庭教師の件はうれしいですが、本当にその方、大丈夫なんですか……

家庭教師としてやってきたのは、彫刻のように美しく、無表情な青年だった。

「シリウス・レオドールです。今日からお嬢様の家庭教師を務めます」

「はじめまして、先生。レオドール先生とシリウス先生、どちらでお呼びすれば良いですか？」
なんだか厳しそうだから、名前より、姓で呼んだ方が良さそうだけどもね。

先生は鴉の濡れ羽色の髪に、深海のような藍色の瞳の持ち主で、冷たい印象の顔立ちをした、二十五歳の青年でした。眼鏡が似合いそうな人です。この世界に眼鏡がないのが惜しまれます。

それにしても、この世界の人達は皆さんかなりレベルの高い美男美女です。

「レオドールでお願いいたします、お嬢様」

あつ、やつぱりね。

「私はリリアナと申します。これからよろしくお願いたします、レオドール先生」

この先生が一体なにをして王都にいられなくなったのか気になるけど、人には聞かれないこともあるからね。冷たそうだけど、なんとなく悪い人じゃないと思うの。

「レオドール先生。私は恥ずかしいことに、なにも知らないのです。世界の成り立ちも、なにもかも」

「お嬢様は、自分が無知であると理解しています。そのように言うのも、勇気があることです。知

らないのを知っているように振る舞うことこそ、愚かです。席にお座りください。まずは、この世界がどのようにできたのか、神話をお話ししましょう」

神は嘆いた。

この世界で一人であることに。

神の涙の雫が一滴頬を伝い流れ落ちると、大地の女神と海の男神が誕生した。

そのとき、神は『創造』を知った。願いに想いと力が重なりとそれは叶うのだと……

その瞬間、神は一人ではなくなった。

神は創造を続けた。

世界に光を与える太陽の男神や、安らぎを与える夜と月の女神といった神々を。

創造神たる神が寂しくないように、子である神々も子を生み、神は十二柱となった。

しかし、人は一人で生きていくには弱く脆い存在。

そんな弱き人へ、創造神は願いを叶える力を与えた。それが魔法だ。

魔法の力を使い、人は繁栄した。

人は創造神と神々を崇拜し、創造神はもちろん、神々も自らの子のように人を愛し、助けた。

神の寵愛が深い者はより強い力を持ち、神の愛し子と呼ばれた。

人は神の愛し子のもとへ集い、やがて国を作る。そうして、大陸には多くの国々が生まれた。

神は自らの愛し子が建国せし地に、加護を与えた。

しかし人は欲深く、さらなる大地と力を求め、神々を交えて争いを起こした。

創造神は嘆く。

自らの子同士が争い合うことを。

創造神にとって、生み出した神や人は、等しく自らの子だったから。

創造神は、神が地上へ降り、力を振るうことを禁じた。

人が国境を越え、争うことを禁じた。

掟を破る者には制裁を。創造神は、力を取り上げたのだ。

それは、魔法の力と加護の消失を意味する。

願いは叶わず、加護は失われ、大地と人心は荒れていった。

人は自らの行いを悔い、改めた。

そして、人はまた願う。豊かな大地で、平和に暮らしていたあの日々を。

願いは天に届き、創造神は慈悲を与えた。

過ちを繰り返すことなかれ。さすれば加護を約束しよう。

しかし、繰り返すならば、再び大地に混沌が訪れる。

神の名を呼ぶことなかれ。地に降り立てぬ神の心を揺り動かすことなかれ。

人が呼んで良い名はただ一つ。

我、セイルレーン創造神のみ。

「こうして、神々の名は秘ひされました。この世界の各国にはそれぞれの神の加護があり、人は神の教えを守ることで、魔法を使うことができるのです」

願いを叶える力なんて凄すぎます。やっぱ、魔法は必修だね。

「私達が住んでいるシエルフィールド王国は、美と愛と豊穡ほうじやくの女神に守護されている国です。それ故に、この国には見目麗みめづるしい者が多く、作物の収穫量も多いのです」

美形が多いのはお国柄だったんですか、先生！

どうりで美男美女が多いわけですよ。謎なぞが一つ解決しました。

「分かりやすい例を挙げましょう。例えば、学芸の女神が守護する国の人々は知能が高く、それ故に知略に優れています。戦いの男神の加護は人々に力を与え、体力がある反面、知では劣おとります。他にも様々な加護を受けている国があります。お嬢様、なにかご質問はございますか？」

はい、先生。話の展開が速すぎます。

私が本当の意味で八歳だったら、絶対に理解できていませんからね、先生。

「レオドール先生、地図はありませんか？ 実際に見てみなければ、他国との位置関係が分かりません」

「それもそうですね」

先生は教材などを入れていた箱の中からある物を取り出し、私の目の前に置いた。それを見て、私は少し驚いて言った。

「地球儀ですね。いや、ここはセイルレーンという名の世界だから、セイルレーン儀？ でも、大地が球体であることは変わらないから、やっぱ地球儀でいいのかな？」

球体の部分をよく見ると、やっぱり大陸の形が前世と違う。そして、その大陸は不自然なまでに大きい。おそらく、他にも大陸はあるけど認知されていなくて、この大陸だけがすべてと思ってるからなんだろうな。

そんなことを考えていると、レオドール先生がいきなり私の両肩をガシツ、と掴つかんだ。

「なぜ、世界が球体であることを知っている？」

「えっ？」

世界が球体であることを知っていて、おかしいということは……

おそらくまだ、このセイルレーンでは世界が丸いと立証されていないんですね。

立証されていないければ、人々が世界を半球か平たい形だと思っけていても不思議じゃない。

そういえば、先生の口調が変わったけれど、これが素なのかな。

「レオドール先生は、どうして世界が球体だと思ったのですか？」

「船で沖から陸に近づくと、遠くに見える山の頂いたてが先に見え、裾野すそは陸地に近づかないと見えない。それに、月の神隠しでは球体の影が現れる。だから、世界は半球などではなく、球体だと確信して

いる」

「月の神隠し？」

神隠しって、突然行方不明になることだよな。

「年に一、二回ほど起こる、月が黒い影に隠れていく現象だ。月がすべて隠れるときもあれば、部分的なものもある」

「ああ、月食ですね」

「月食？」

「月の神隠しのことです。世界は太陽を中心にしてまわっていますが、太陽とセイルレーン、月が一直線に並ぶとき、セイルレーンの影が月にかかって、月が欠けて見える現象のことですよ」

宇宙から世界を見たら丸いと証明できるけど、この時代に宇宙船なんかあるわけないもんね。でも先生の言った現象からも、世界は球体だということが導き出せる。簡単そうで意外と難しい証明なのに、先生って凄い。

先生は、私の両肩から手を離れた。

「旋回説か。それこそが、私が王都にいられなくなった原因だ」

旋回説……地球でいうところの地動説のことなんだろうな。

「その旋回説を説いただけで、どうしてレオドル先生が王都にいられなくなるのですか？」

「神話によると、世界のすべてはセイルレーンを中心まわっている。そうでなければ、世界が根底から覆ってしまうぞうだ。私は神への反逆者らしい」

そうか、先生は——

「レオドル先生は先駆者なのですな」

先駆者の多くは、初めは世の中に認めてもらえず、人々から笑われた。だけど、先生は決して笑われるような人じゃない。先生は、正しいことを説いただけなのだから。

「レオドル先生。人は、数歩先のことを受け入れることができます。けれど、それ以上先のこととは分ならず、受け入れられないものです。ですが、時代が進み、技術が進歩すれば、先生が正しいことはいずれ証明されます。世の中の流れに逆らう先駆者こそ新たな流れを作り出すのです」

私が前世でいた地球でもそうだった。だから、私は世界が球体であることも、太陽を中心に惑星が軌道を描いていることも知っているのだ。

「私、レオドル先生に教師として来ていただけで良かった。先生のような貴重な方を独り占めして、これからたくさんの方を教えていただけなのかと思うとうれしいです。先生の価値を分かっている王都の人達など、ざまあみろです」

後世の人達が惜しい人物を手放した、と悔しがる様子が脳裏に浮かび、私は思わずクスクスと笑ってしまふ。

すると、先生はお腹をおさえ、身体をくの字に曲げていきなり大笑いし始めた。

それは、初めて見せてくれた表情。

「お嬢様、口が悪いですよ。それにしても、こんなに笑ったのは初めてだ」

私は頬つぺたを丸くして、先生を睨みつける。

「そんなに笑わなくてもいいじゃないですか。私は、思ったことを正直に言っただけです」
笑いがようやくおさまった先生は、何食わぬ顔で姿勢を正し、私を見つめた。

「口が悪いお嬢様には教育が必要ですね。私はしばらく王都に戻ることができないので、これから長い付き合いになりそうです。ですから、やはりレオドールではなく、シリウスとお呼びください」

「シリウス先生ですね。では、私のこともお嬢様ではなく、リリアナと呼んでください」

「リリアナ様、と呼ばせていただきます」

私はにっこりと笑って、先生に右手を差し出した。

「シリウス先生、これからよろしくお願いいたします」

差し出した手は、力強く握り返される。

「リリアナ様、こちらこそよろしくお願いたします。そして、ありがとうございます」

そう言って笑った先生の笑顔は、とても穏やかだった。



私の名は、シリウス・レオドール。

世の中は、馬鹿ばかりだ。

私は、シエルフィールド王国の活気ある港町で、船乗りの息子として誕生した。

物心がついてからというもの、私はこの世の謎に夢中だった。

なぜ、昼と夜があるのか？ 海は波打つのか？ 夜空で星が輝くのか？

大人に質問しても、太陽の男神がお休みしている間は夜と月の女神が安らぎを与えてくれるんだよ、などと曖昧なことを言い、到底満足の得られる答えはくれなかった。

私は書物を読むのが好きだった。そこには知識が溢れていたからだ。周囲の大人達が口にするような子供騙しの答えは書物にはない。私の知的欲求は、歳を重ねるごとに高まった。

しかし、父親は船乗りで、しがない庶民。そんな父のもと、しかも五男として生まれた私が受けられる教育などたかが知れている。私は自らの未来を考え、子供ながらに絶望した。

私の知りたい答えは、永遠に得られそうにないことに……

しかし、私が十三歳のときに好機は訪れた。

港町に有名な学者が滞在することになったのだ。私はさっそく学者のもとを訪ね、問いかけた。

「私が貴方に教えを乞うたら、貴方は私になにを授けてくれますか？」

「私は君が求める答えを持っていない。しかし、答えを知る機会を与えよう。小さな探検者よ」
その日から、私は学者の弟子となった。師は、私に彼の知りうる知識をすべて授けてくれた。

しかし、私の知的欲求はおさまることなく、さらなる高みを目指した。
私は再び、世界の謎に取り組んだ。

私は二十五歳になったとき、王都の学会で、ある説を説いた。